

伊達宗行先生との思い出

先端基礎研究センターの初代センター長であり、

大阪大学名誉教授の伊達宗行先生が2023年2月27日にご逝去されました。

93歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

生前、先端基礎研究センターにおいて、先生とご親交のあった二人の方に、先生との思い出を寄稿いただきました。

伊達宗行先生

大阪大学名誉教授



略歴

1929年生まれ 宮城県仙台市出身
 1952年：東北大学理学部物理学科卒業
 1955年：同大学院理学研究科物理専攻中退
 1955年：同大学科学計測研究所（現同大学多元物質科学研究所）助手
 1955年 - ：同大学金属材料研究所助手
 1959年 - ：大阪大学理学部講師
 1961年：同大学理学博士。論文題目「塩化コバルトの反強磁性共鳴吸収」
 1962年 - ：同大学理学部助教授
 1964年 - ：同大学理学部教授
 1992年 - ：同大学理学部長
 1993年：定年退官、名誉教授

1992-1993年、1994-1995年：日本物理学会会長（第48期-50期）

1993-1999年：日本原子力研究所（現日本原子力研究開発機構）先端基礎研究センター長（初代）

受賞

1971年：松永賞

1980年：仁科記念賞「超高磁場の発生」

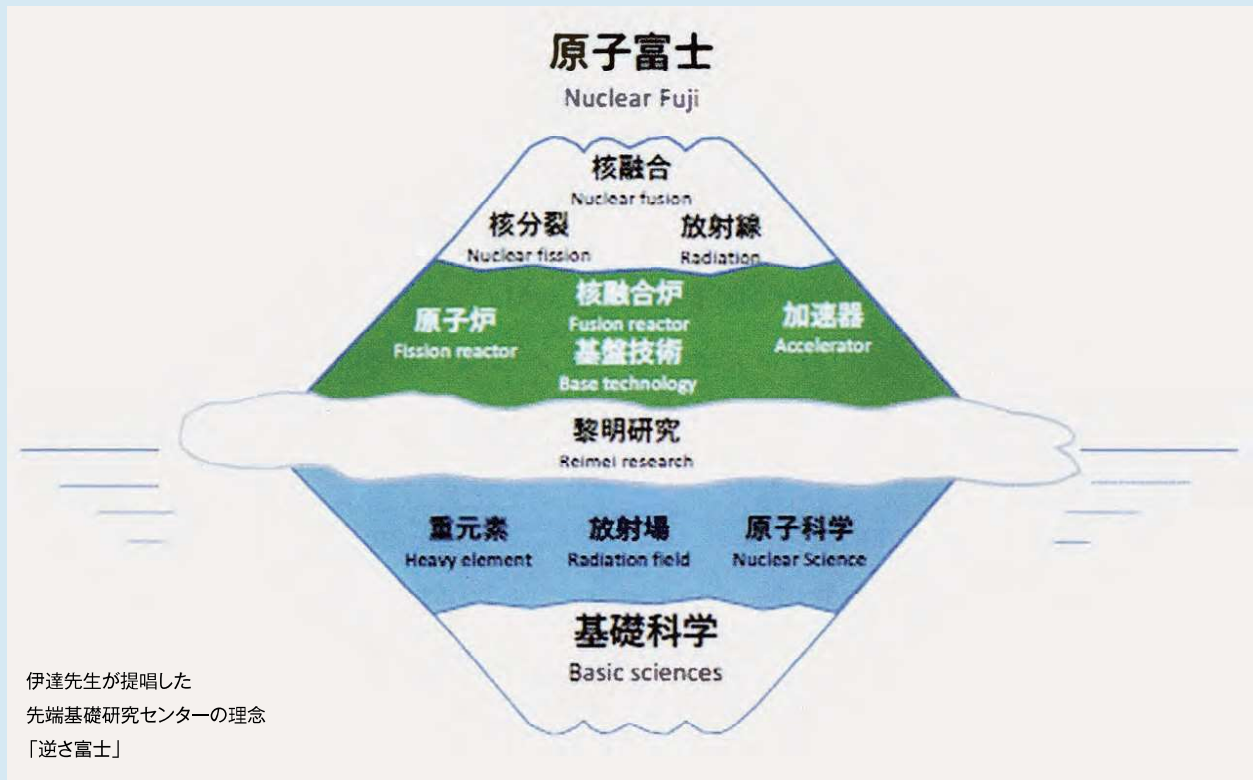
1985年：日本金属学会論文賞

1991年：藤原賞「超強磁場の生成と物性科学への応用」

叙勲

1991年：紫綬褒章

2000年：勲二等瑞宝章



伊達宗行先生を偲んで

吉田善行

(株)アトックス 特別顧問
元 アクチノイド溶液化学研究グループ(第一期) /
機能性場アクチノイド化学研究グループ(第二期)



1993年4月、前月まで大阪大学教授で日本物理学会会長だった伊達先生を初代センター長に迎えて、発足したばかりの先端基礎研究センターの初会合で高ぶる気持ちを抑えながら先生のお話聞き入ったことをはっきりと覚えています。冒頭、基礎科学研究“逆さ富士”論です。『山頂に核分裂、核融合、放射線を仰ぎ、裾野に原子炉、加速器、基盤技術を広げる“原子力富士”が従前の原子力研究開発の姿。先端基礎研究はこの原子力富士を支える、さしずめ湖に映る“逆さ富士”です』と、お得意の“イラスト”を指しながら並々ならぬ決意を語られた第一声でした。独りよがりになりがちな広大な分野の基礎研究を束ねて、全体を包む理念として示された“逆さ富士”論の真意を私達が理解するのは、先生の教えが研究成果に繋がることを実体験する後々のこと。

高級パイプタバコの香りが漂うセンター長室を訪ね、紫煙の先の優しいお顔の先生と会話するひとは筆者達への至高の贈り物でした。科学や研究の話題は勿論のこと、グループ対抗卓球会やセンター芋煮会で“よく学びよく遊べ”を体現したいがどうか、なぜ詰将棋は人を虜にするのか、温泉とくに秘湯の魅力は何か、先生の価値観を詰め込んだ先端基礎新棟の設計図をどう思うか等々、話題満載でした。ある日の会話で「北海道オンネトー・湯の滝に金属

を酸化する能力を持つ微生物が住むらしい。採りに行ってみませんか」とのお誘い。勿論快諾してお供し、無事に目的の微生物を採取できたのだが、これが後に先生が発案されて始まった公募型「黎明研究」での成果「プルトニウムを選択的に酸化・吸着する微生物の発見」に繋がったのです。研究計画にない意外な発見を重視されるロマンチズムの真骨頂のような成果であったと思います。写真は、オンネトーへの道中、屈斜路湖を望む美幌峠で撮った思い出が一杯詰まった一枚です。

先生のブレのない迫力のお言葉が今でも心に残っています。「人類は原子力を手放すほど愚かではない。但し社会との整合性はまだまだ不十分。もっと大局的で、明快で、周到な戦略が必要。そして、それを展開するための凜とした指導力が求められるんですよ」。繰り返し噛み砕きたい先生の教えです。先生は今、はるか彼方から現状をどうぞ覧になっているのでしょうか？



分野間の交流から 新しい科学を創出する

熊田高之

現:物質科学研究センター階層構造研究グループ
当時:原子トンネル反応研究グループ



大阪大学理学部伊達研究室出身の筆者は、先端研創立3年目の1995年に当時の原研に入所し、原子トンネル反応研究グループという極低温化学反応における量子効果を研究するグループに配属されました。とはいつても放射線化学の研究室です。放射線化学の研究者は無数にいるのに、磁気共鳴分光くらいしか接点のない素人の筆者でよいのかと思いつつ研究をスタートさせました。筆者が放射線化学の素人なら、さすがの伊達先生もこの分野では立派な素人です。議論をしても、物性・磁性物理のような何でも知っている感は微塵もありません。しかし議論に一切の遠慮は無く、磁性物理を話す際と厳しさは変わりません。誰々の法則・誰々の原理・誰々効果という、それは何の物理量に対する何の何次

摂動項かと隅から隅まで聞いてきます。それでも部屋に戻って同僚に議論の内容を説明すると「そんなばかな!」という話になり、学会でも「そんなわけない!」と打ちのめされる時期が続きました。まさに「思ひて学ばざれば則ち殆し」です。

しかし、筆者自身は何を言われようが、自分の仕事は決してトンデモ科学ではないという自負がありました。伊達先生が筆者に要求したように、他の先生が専門用語を並べ立てて議論を煙に巻こうとしても食い下がり、自分の一般的な物理の用語を用いて誠実に説明し続けました。長い時間を要しましたが、その後筆者の仕事は、放射線化学だけでなく反応科学、分子分光、低温物理の分野で新鮮味を持って広く受け入れられたと思っています。

伊達先生は先端研の最終講演会で、規模に合った組織づくりにこだわったとおっしゃっていました。筆者の勝手な解釈ですが、先生は職員数が数十人しかない先端研を各分野の先端研究の羅列ではなく、分野間の交流から新しい科学を創出する場を作ろうとしていたのではないかとと思っています。そして筆者はその試金石であり、その教えを具現化した教え子というちょっとした優越感を抱きながら今日も研究に勤しんでいます。